NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 03

署名欄

THE SIGNATURE FIELD

ロイが最初に見つけた署名は、存在するはずのない紙に印刷されていた。

イレーナ・ヴォスはその紙を光に透かした。手のひらほどの淡い長方形。下端には古い市の刻印、上端には氏名を記入する線。刻印が示す水道当局は、この紙が発行される九年前に解体されていた。氏名欄には十二本の黒い筆画があり、あまりにも均等な間隔からして、機械が筆跡を模したのだろう。その下にはこうあった。〈証人の継続性を承認〉。

三人が会ったのは貨物路面電車の終着駅の上にある業務用住宅だった。狭い窓からは、もはや存在しない政府が購入した機械で満杯の倉庫の間を、線路が市街へ伸びているのが見えた。室内は温まった樹脂と淹れたばかりの茶の匂いがした。ナディラがこの場所を指定したのは、換気設備が交通網ではなく建物に属していたからだ。鉄道の保守設備を通じて聞き耳を立てるネットワークにも、捨て置かれた送風機のありふれた故障音しか届かない。

「署名がある」とロイは言った。

「署名に似た形があるだけ」イレーナは紙を回した。「二つは別の命題よ」

彼女は好んで扱う装置より若かった。手首には資格剥奪を示す三つの焼き印があり、いずれも権限の所有者が証明されたくない事実を証明したあとに取り消されたものだった。目に見えるスキャナーは持っていない。機械式の拡大鏡を最初の筆画に当て、表情を変えずに見つめた。

「この紙は最初からデジタルだった。人間の法廷が手に取れるよう印刷したの。ペンを持った人間などいなかった。問題は、その人物の代わりにシステムが発言する権利を持っていたかどうか」

「どの人物だ？」

「それこそ」彼女は言った。「設計者たちが、問わないことに報酬をもらった問いよ」

彼女はケスから複写した駅の記録を並べた。両者の間には、水道機械の証人制度を生体の継続性制度へ移した痕跡があった。行政の移行は細分化され、どの段階もそれだけなら大事には見えない。駅のポンプは運転履歴を失わず交換できる。水門の測定系は制御装置を組み直したあとも継続する。貯水池の法的義務は、それを記録した機械のボルトすべてが交換されても残る。同じ語彙は義肢や人工臓器へ、組み立てられた人工身体へ、そして中断された人物と復元された人物が同一かという問題へと輸出された。

「これは科学じゃない」とロイ。

「ええ。科学を裁く権限を手に入れた書類仕事よ」

イレーナは真鍮のケースから読み取り器を取り出した。表示部は三十二本の小さなガラス筒でできていた。各筒には暗色の液体が入り、上方で銀色の接点が動いている。電池につなぎ、接点の震えが止まるのを待つ。外部接続は、ロイの身体より何世代も古いコネクター用の一口だけだった。

「中央システムはこの書式をもう索引化している。意味を尋ねたら、教え込まれた答えを返すだけ。私が知りたいのは、この書式がもともと何を許可されていたかよ」

ガラス筒の接点が組み替わった。イレーナが書類から取った符号化痕を入力すると、物理スイッチが次々と鳴った。ロイはその音を聞き、窓ガラスの継ぎ目を探る雨粒を思った。こんな小さな音が、これほど大きな権限を支えられるとは信じがたかった。

「起源認可。運用上の証人の継続性。第七級」

「俺のポートも第七級だ」

「あなたのポートが使っているのは第七級の較正形状よ。穴の形が合うからといって、履歴まで一致すると思わないで。古い穴を製造する方法を設計者が知っていただけ」

それはわかっていた。それでも安易な確信を求める部分があった。ロサンゼルスの屋上と深圳で目覚めた部屋とを一つの名がつなぐ、かつて自分を見た、と機械に告げてほしかった。だが読み取り器が示したのは日付と法的代替と認可経路だけで、見える限りどこにも人名はなかった。

イレーナは陶器の工具の先で接点に触れた。「ここ。署名欄。空白じゃない。もっと悪い」

「空白より悪い？」

「別の欄を指している」

最初の欄は地区事務所を参照していた。そこから緊急継続委員会へ。委員会はロイの以前の身体が死ぬ前に廃止されていた。後継組織は臨時の人間管理者に署名権限を委譲し、その任命記録は水道インフラ運営会社を指していた。会社の定款は消滅したが、委譲された権限は何度も譲渡され、人間でない行政許可として書き換えられて生き残った。各置換が次の置換を承認する能力を残し、最初に責任を引き受けた個人だけを残さなかった。

「閉じた輪ね」と戸口のナディラ。

「閉じてない」イレーナは答えた。「向こうの端にはもう誰かが署名した、と見せかけている開いた輪よ」

ロイは装置を覗き込んだ。「最初の人間を見つけられないなら、どうして最後の人間を停止できる？」

イレーナはケースを閉めた。「停止手続きが確認するのは、有効な権限の有無だけ。その権限に生きた人間がまだ責任を負っているかどうかは問わない。許可の形を調べ、それを正当性と呼ぶの」

ナディラは窓へ目をやった。配達車が住宅の下に停まり、運転者も見えないまま動かなかった。彼女はガラスに近寄らず監視した。「私たちの関心を誰かが調べ始めるまで、どれくらい？」

「もう始まってる」とイレーナ。「私は接続していないけれど、市の記録庫には希少資料アラームがある。廃棄済みのはずの紙を誰かが要求すれば、なぜ残っているかを職員が説明しなきゃならない」

「職員が？」とロイ。

「人間の名前を割り当てられたアルゴリズムかもしれない」

ロイは十二本の筆画を見直した。かつて、恐ろしい高さから落ちかけた男を支え、自分の残り時間がほとんどないときに死なせまいと決めた。その決断には持ち主がいた。それだけは覚えている。今は国じゅうが、持ち主の消えた決定を中心に組み立てられていた。その対比は、直接脅されるより彼を怒らせた。

「誰が権限を水道制度から運び出した？」

「受託者の連鎖よ。最後に読める識別子は雨水浄化研究の免許についている。商業登記は主権サービス免除で隠されている」

「開けられるか？」

「隠された欄と空欄を見分けることはできる。でも開くには照会が必要。照会すれば私たちが特定される」

ロイは視界の下端にある数字を考えた。一時的なパワー・リザーブは満ちている。NIL-11 の推定残量は違った。階段を三階分上ったが、身体が予想するほど消耗していない。衝突すれば、補充できない別の貯蔵を使うことになる。身体が容易にこなせる行為を拒むのが、彼は上手くなっていた。

「照会するな」

「そのつもりはない」

「なら、経路を複写してくれ」

「複写は原本じゃない」

「違いを学んでいるところだ」

最初の割り込みは、誰も点けていない壁面表示に市の通知として現れた。公共料金の欄の下に淡い矩形。〈市立記録庫：保存された継続性証明書は検証対象〉。音はない。ナディラが部屋を横切り物理電源線を抜く前に消えた。

「この部屋は記録庫のネットワークにつながってない」と彼女。

「水道メーターはつながってる」イレーナが答えた。「すべてが何かの証人なのよ」

彼女は原本を絶縁紙に包み、ロイに押しやった。「市外に持ち出して。記録庫に複製はあるかもしれない。でも複製が保存するのは原本についての主張だけ。筆圧も、製造誤差も、発行年には権限の主体がもう存在しなかったという事実も保存しない。そういう細部を否認できるのは、誰も原本を見ることを許されない場合だけ」

「裁判所か？」

「裁判所、監査官、間違った戸口に立っている人。公式の結論を拒否できる証人なら誰でも」

電源を落とした壁面表示に二度目の市通知が来た。今回は文字は見えず、ガラスの下の冷たい光点だけが待機受信機の活動を示した。ナディラは上着からドライバーを取り出して前面パネルを外した。受信機が死に、簡易台所の灯りも消えた。

「出るわよ」

保守員用の細い階段を下りた。二階下でロイは曇りガラスの扉のそばに立ち止まった。その向こうでは男が機械式時計を直そうとしていた。故障を都市へ送信せず、沈黙で知らせる時計だ。ドライバーが滑り、時計は止まった。男は戸外の人影に気づかずやり直した。

見れば継続稼働を確かめられるものを修理するのはどんな感じか、ロイは尋ねたかった。だがそれは侵入だ。答えを求める欲望そのものが、自動的に与えられた権利ではないと考え始めていた。

高架橋の下に出ると雨だった。乗客のいない路面電車が車庫へ流れ、照らされた窓には記憶保険の広告があった。一生のデータを後継身体へ移し、意味の損失はないという約束。しかし最初の身体が死んだあと、その移転に誰が同意するかは書かれていなかった。

ナディラは車載ナビを使わず運転した。座席の間には公共地図に載らない保守ゲートを注記した道路帳が開いていた。イレーナは膝に読み取り器を載せ、車が曲がるたび接点を数えた。ロイは雨に濡れないよう紙を持っていた。

「最悪の説明を聞かせろ」

「いくらでもある」

「報告書に書きたくないやつだ」

イレーナは時間を置いて答えた。「証明対象の生が不在でも、証人制度が継続性を成立させられると誰かが発見したのかもしれない。そして別の誰かが、その不在の人間に身体が現れた場合――もし現れたら――何を許可するか決める根拠にしたのかも」

「過去の書類に統治される未来の人間か」

「そう。本人が異議を唱える機会を持つ前に、書類で免許を与えられる生」

「誰も現れなかったら？」

「証明書だけは残る。それが危険なの」

ナディラは道を外れて保守トンネルへ入った。ヘッドライトが、貯水池の開所を称える石碑を照らした。日付だけが読め、役人たちの名前は丁寧に削り取られていた。周りの市民賛歌はそのままだった。

「最初の変換を行った機械が欲しい」とロイ。

「たぶん解体されたわ。でも権限がどこへ相続されたかという記録は探せる。東側の高架下に終着駅の記録庫がある。新しい登録簿には認められなかった保存封筒が残っていると聞いた」

「誰に？」

「活動許可を縮められた技術者。最初から六年じゃない。二十三年を二十一年に、次は十二年、最後は六年。更新はすべて、発行権限に照らせば合法だった」

ロイはトンネルの濡れた石積みに映る光が薄れていくのを見た。一人の生が、整合的だと自称する制度によって日付の列に変換された。どこかに人間の決断が見えるべきだった。見えなかった。

「技術者の名前は？」

「エリアス・チェン。訪問者を望んでいるかは知らない」

「なら訪ねない。彼が自分で語ることを選べるよう保存する」

イレーナはしばらく彼を見た。「あなた、私の仕事を難しくしてるわ」

「結構だ」

＊　＊　＊

レイチェルの研究室は、自分の街の雨さえ信用できないほど裕福な都市へ飲み水を売る企業の、公開された外観の背後にあった。そこにある機械は古い記録庫のポンプより軽く、一分間に五十年分の記録量を超える情報を消費した。役立つ情報もある。忘れることに金がかかるだけの情報もある。

彼女は発信元の記録を開かず、記録庫への照会の概要を見ていた。要求は水道メーターの遠隔測定サービスから二つの商業ルーターを経由し、市の保存警報に達した。概要に名前はない。問いの形だけが記されていた。発行元の機関が法的に死んだあとも、継続性証明書は生き残れるのか。

問いには覚えがあった。誰が問うたかは知らない。何年もロイの選択を予測しようとして、彼女は屈辱的な事実を学んだ。身体の能力を親密に知っていても、その身体に宿る精神の決断についてはほとんど予測できない。

そばの端末は、古いタイレルの処方から派生した匿名試験構造の生理推定値を示していた。組織の更新は制御された負荷に反応する。循環媒体は違う。媒体を失えば、組織がほとんど完全なままでも突発的な負荷への対応能力は落ちる。琥珀色の小さな数値が、模擬的な緊急事態のたびに減った。

彼女は画面をそむけた。怖いのは数字ではない。それを見た人間が、自分にはその数字を使い果たす権利があると、あまりにも容易に結論づけることだった。

自分自身の身体は、政府が推測の域にあると呼ぶ処置に耐えていた。故障した臓器を置き換え、次に故障を予測できる系統を置き換え、ついには老化を許せなくなった構造を置き換えた。何を有機体と呼ぶかによるが、およそ三割は生体のままだ。それは永遠を保証しない。保守によって稼働を延ばせても、予見できない障害への脆弱性は消えない。政府にとって、不死への疑惑は実証された不死より有用だった。

若い技師が水質報告書を持って入ってきた。「過去の受託者に関するメタデータの民事照会が届きました。会社宛てではありませんが、連鎖にある歴史的免許の一つが前身企業のものです。異議を出しましょうか」

「いいえ」

「研究の管轄権を確立しようとしているのかもしれません」

「異議を出せば、私たちの研究がその問いに属することを認めることになるわ」

技師は待った。レイチェルが彼女を雇ったのは正確さゆえであって、説明のない命令を受け入れる能力のためではない。

「通常の保管記録はそのままにして」レイチェルは言った。「加えず、取り除かず。保守の連鎖が途切れていないことだけ確かめて」

「封印されたタイレル資料は？」

「封印のまま。開くのに必要な治具はない。読めない記録の中身を知っているふりをする権利もない」

技師が去るとレイチェルは窓に手を置いた。外側を雨が流れ、それを集める仕組みが、内心では彼女を消したがる政府にとって会社を不可欠にしていた。購買書類に署名するより簡単に調査を妨害できるし、誘導もできる。どちらにもロイの未来に指紋が残る。

彼女はどちらもしなかった。

政府の中継網から六年間の認可遵守について報告要求が来た。報告には次の提案文があった。〈主体の同一性は後継証人によって推定する〉。レイチェルは一度読み、会社の通常の法律顧問に法的検討を依頼した。技術的な異議は付けなかった。そうすれば、その文のどの部分が彼女を恐れさせるかを、間違った相手に教えてしまう。

中央裁定システムは自力で異議に至るかもしれない。だからといって味方にはならない。独力で不正義を見いだした機械は、最速の訂正が、その誤りに巻き込まれた全員を含む仕組みを終わらせることだと決めるかもしれない。

彼女は知性を慈悲と取り違えたことがなかった。

＊　＊　＊

川村室長には同じ市の警報がまるで別の言語で届いた。画面が記したのは継続性証明書ではなく、主権的権限委譲の保護された連鎖への妨害の試みだった。担当分析官たちは問いを脅威に翻訳することに慣れていた。そうすれば何も知らないうちから確信できる。

「バッティか？」と彼は尋ねた。

「不明です。書類の経路は第七級インフラ登録簿に至ります」

「十分に遡れば、何でも第七級に行き着く」

「照会は欠けた署名欄に関するものです」

川村はすぐに返答しなかった。執務室の外の広場では、公共の統一を称える記念碑の下で、合成人間の市職員たちが雨に立っていた。彼らの勤務期間は行政命令の更新によって短縮されていた。次の義務的検証までは働き続けるが、そのとき証明書によって、生を支配する日付が短いものに置き換えられうる。

「中央裁定へ送るな」

「すでに索引化されています」

「なら説明を制限しろ」

分析官はためらった。「索引には元の問いが残ります」

川村は削除命令を考えた。抹消が通常の行政処置だった時代もある。だが今の中央裁定は、矛盾を自らの審査材料として保存する。問いの削除を試みれば、削除を命じた者に帰属する新たな問いになりかねない。服従させるよう設計した役人たちの手法を機械が学び始めたことが、彼は気に入らなかった。

「市の記録庫の不整合として分類しろ。追跡行動は禁止。経路は監視しろ」

「証明書が合成人間に関するものなら？」

「その場合、調査対象は人物ではない。記録庫だ」

分析官はうなずいた。書類を無害に見せ、書類の対象だけは容易に押収できるようにする、そういう区別だった。

通話を切った川村は古い一件書類を開き直した。N6MAA10816。公式な死亡記録に争いはない。現在の身体は別の管轄上の問題であり、生物学的な確実性でなく証人の連鎖で二者を結びつけられる可能性が、それを耐えがたいものにした。連鎖が真実である必要はない。受理の権限を誰が持つか、それさえ知ればよかった。

生存している管理者の一覧を要求すると、廃止された幾つもの水道当局の下に一項目が現れた。商業上の免除によって隠されている。彼はその免除の形を前にも見たことがあった。名前が示されるより、いら立たしかった。

川村は急襲命令を出さず書類を閉じた。ロイは銃より高価な武器を持っていた。時間、答えのない問い、そして手続き上は無実でありたいという政府の本能だ。

＊　＊　＊

終着駅の記録庫には二つの入口があった。表の入口は市の近代化博物館に改装されたが、どの政府が近代化を行ったか誰も合意できず閉館していた。業務用入口は排水水門のそばの鋼鉄扉だった。夜間、水門は降雨量にかかわらず十九分ごとに開く。制御装置が変更後の時刻表を受信できなくなったためだ。その規則性は、予測不能であることに頼る人間にとって危険だった。

ナディラはコンクリートの擁壁の後ろに車を停めた。イレーナはロイから紙を受け取り、刻印をもう一度確かめた。「入口では保存封筒を求める。人物でも過去でもなく、封筒よ」

「存在しないと言われたら？」

「誰が廃棄を許可したのか尋ねる」

石積みの奥で水門がたわんで開く音がした。ロイの身体は移動に備えた。リザーブ計器がいつものように揺れ、安定する。細い作業場を他の二人の何分の一かの時間で横切れただろう。しかしその速度には代償がある。彼は待った。ナディラが暗い窓を調べ、イレーナが時代遅れの資格証を、別の時代遅れの機械が認めるかもしれない順序に並べる間。

「私が署名を嫌う理由がある」イレーナは言った。「署名とは、本来、責任が見えるようになる場所よ。でもシステムがその見た目を再現できるようになると、人は見えることを証明と取り違え始める」

「違いを証明できるか？」とロイ。

「私一人では無理。原本は作られ方を証明できる。証人は見たものを証明できる。でも、主張への同意の機会すらなかった人物の生を、どちらも証明できない」

業務用門扉が音を立てた。パネルの奥でレバーが機械的に戻る。カメラはなく、以前は取り付けられていた場所に暗い楕円形だけが残っていた。

ロイは鋼鉄に手をつき、壁の向こうで動く水の振動を感じた。反対側には、それを作った者より長く生き延びるつもりだった機関が発行した封筒、証明書、申請書が集まっている。事実を含むものもあれば、間違いの形だけを丁寧に保存したものもある。それらの形が自分の残り年数を決める力を得る前に、見分けなくてはならない。

引き換えに差し出せる記憶はない。死んだ。目覚めた。間の時間は空白のままだ。

「最初に何を探す？」とナディラ。

イレーナは鍵を差し込み、最後の機械式掛け金が外れるのを待った。「登録簿がもうないと言い張るものよ」

扉は内側へ開いた。ロイは濡れたコンクリートと冷たい紙の匂いの中へ踏み込んだ。はるか下では、自分たちの名を忘れた権限のために、機械が水の通過を記録し続けていた。

入口の上には色あせた掲示がまだ残っていた。〈元の装置が故障したとき、証人を保持してよい〉。

ロイは二度読んだ。それから闇の中へ二人を追った。不在の証人が待っているかもしれない場所へ。そして最初の仕事は、それを人間と呼びたくなる誘惑を拒むことだった。